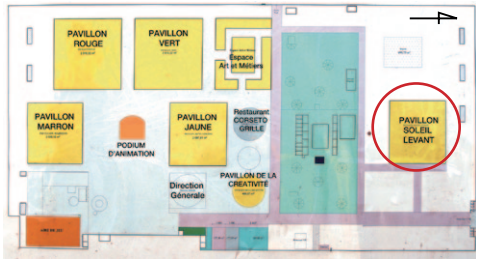
# ブルキナファソの土の家 _2

**2012/10/26～11/4**




SIAO会場概略。南側に赤・緑・黄・茶の４館。日の出館は北側。

日の出館ファサード

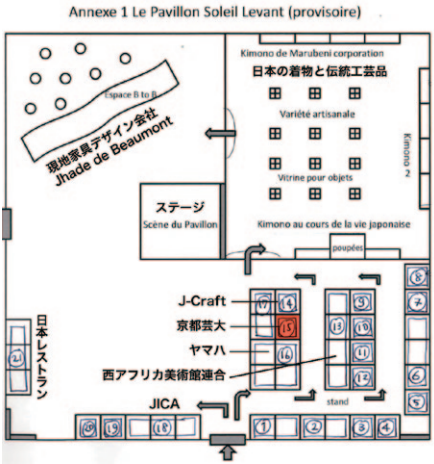
日の出館入口。市民に人気があり、連日長蛇の列ができる。

2012 年 10 月 26 日～ 11 月 4 日、日本大使館の招聘により、首都ワガドゥグで開催された国際工芸見本市 Salon International de l'Artisanat de Ouagadougou (SIAO) に参加した。

SIAO は 1988 年から 2 年に 1 度開催されるアフリカ最大の工芸見本市で、アフリカ・欧州・中東から約 30 万人が訪れる。ワガドゥグ空港近くの展覧会公園に、大きなパビリオンが 4 つある。2012 年度は第 13 回展で、日本が名誉招待国となり、Pavillon Soleil Levant（日の出館）名づけられた 5 つ目のパビリオンが新設された。そこで、着物や伝統工芸を中心に、日本文化の紹介が催される予定だった。

工芸家でない私が参加依頼されることになったのは、前年（2011 年）の現地調査の際、大使館に勤務する文化人類学者の遠藤聡子さんを介して、杉浦勉大使にお会いしたことがきっかけである。杉浦大使は東大で西洋美術史を専攻、丸紅で文化事業に従事したのち、パリ日本文化会館館長を経て、ブルキナファソ大使になられた方で、芸術にも明るく、日本とブルキナファソの文化交流を進めておられた。そこで、現代日本の芸術文化の紹介の一環として、つちのいえプロジェクトと京都芸大工芸科の研究教育を、「日の出館」で紹介してほしいと依頼された。3m 四方の展示用ブース、監視員とホテル - 会場の送迎車も用意すると提案いただいた。

だが、出展依頼を受けたのはわずか 2 ヶ月前の 2012 年夏であり、旅費や運送費、プロジェクター等の備品は大使館では調達不可能なため、こちらで用意する必要があった。展示に必要な作品や道具を一人で運ぶにも限界があった。当時私は芸術資源研究センターの開設準備で多忙を極めており、当初ためらったのは事実である。しかしながら、科研費で旅費や備品費がまかなえること、工芸科三専攻の先生方が協力を快諾下さり、またデザイン科の辰巳教授が大型ポスターの印刷に協力下さることで、SIAO 参加が可能になった。




日の出館内の会場レイアウト。赤印がつちのいえ／京都芸大のブース。

展示したのは、工芸科三専攻を紹介するB1ポスター3点、つちのいえ関連のB1ポスター4点、染織の藤井良子先生のモスリンの服1着、漆工の栗本夏樹先生の紙ベースの漆器小品数点、漆工4回生・清水みゆき(つちのいえ受講生)の小品、それと工芸科とつちのいえを紹介する4種類の映像であった。

予想していたとはいえ、見本市会場の展示ブースというのは既存の廉価なパネル壁で、看板やサインのための部材もなく、見つけたロール紙を破ってマジックで「京都芸大」と仏文で手描きした。作品やミニプロジェクターの管理を監視員にまかせるのもむずかしく、結局、ポスター以外は毎朝ホテルから運んで展示し、閉館する夜8時過ぎにホテルに持ち帰ることを毎日繰り返さざるをえなかった。

とはいえ、そうした身動きしにくい状況は、逆に、ブルキナファソ、トーゴ、ニジェール、カメルーンなど西アフリカ諸国の工芸家・画家・彫刻家・芸術関係者との出会いや交流の機会をもたらしてくれた。映像とポスター、小品中心の展示とはいえ、他ブースの物産的な展示とは異質な内容に反応する観客が予想外に多かった。つちのいえは形がアフリカ的なので現地の人になじみやすいが、風土のちがいや日本の伝統技術の活用方法、素材循環の考えに関心を持つ者が多く、「近代化への抵抗だな」とある彫刻家が言ったときは驚いた。問題意識が伝われば、さまざまな出自のアフリカ人アーティストたちのあいだで、刺激的で楽しい対話が生まれる。

現地で "artisanat" という語は、日本語の「工芸」より広く、「手によるものづくり」全般をさす。工業技術の浸透がまだ一部の都市にとどまる西アフリカでは、商品としての工芸品の生産体制がある一方、意識的なアーティストにとっては、手づくりの技術は、グローバル経済の浸透による画一化に対して、自分たちの伝統や価値観を見直すための抵抗の手段になっている。

私のブースの前では、「西アフリカ博物館連合」の主催で、西アフリカの伝統的な染織技術の保存と活用状況が展示され、職人が毎日機織りを実演する一方、それを応用した現代的なファッションが人気を集めていた。博物館が伝統技術の保存と活用を訴えていたのが印象に残る。さらに興味深いのが、ビニールやアルミ缶などの工業製品の廃材を再利用してつくる装飾品や玩具である。消費文明の流入と共に大量に発生するゴミが生活環境を悪化させているが、"artisanat" が廃物を生活を彩る要素に転生させていることに、希望と可能性を感じた。

日本の古都にある京都芸大そのものへも高い関心が寄せられれた。仏語の大学案内などないので、口頭で説明するほかなく、充実した英文のホームページすらない本学の状況(当時)が悔やまれた。(井上明彦)

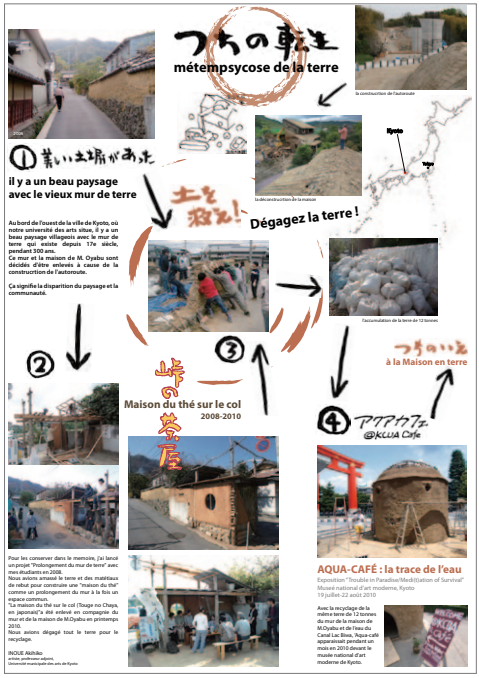
＊『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』vol.57 2013年 より抜粋

即席の展示ブース。左に工芸科、右につちのいえの紹介、中央に映像。

つちのいえブースの前で、伝統技術の創造的活用の話題で頻繁に議論。教育省の女性(左端)、カメルーンの木彫家ワン・マムーダ(右端)ら。

小学生たちの訪問を受けた。大学生たちからは質問攻めにあった。

武蔵野美大に留学したこともある画家のLougué Kouさんと、青年海外協力隊出身で西アフリカで活動する陶芸家の西村早百合さん。



展示したB1ポスター類（デザイン：井上明彦）

SIAOは、工芸＝マニュアルなものづくりを、観光や経済振興の牽引役にするブルキナファソの政策の一環である。アフリカ最貧国の一つでありながら、工業化と経済優先でなく、伝統と手仕事と観光の国として自国をアピールしているのだ。穏やかな国民性もあって、さまざまな支援に取り組む日本人も多い。

だがブルキナファソには、他の西アフリカ諸国にはある公立の美術大学がない。西洋型のファイン・アートはもう不必要だが、メタ工芸的な視点をもつアートの研究教育を導入すれば、伝統や文化財保護からイノベーションまで、さまざまな分野の新たなつながりを生み出せるのではないか。アーティストたちと話しながら、そう思った。

伝統的な染織技術の保存・活用を訴え、職人が機織りの実演を毎日行う。織幅は10cm前後。

ゴムサンダルを溶かすなど、廃品のリサイクルでブレスレットやビーズをつくるマリの会社のブース。

SIAO会場の南に工房とショップを併設した「ワガドゥグ工芸村 Village artisanal」がある。ブロンズ彫刻、テキスタイル、木彫、廃品をブリコラージュした玩具や装身具などを若い職人たちが製作販売していた。

ルゲ・コウさん（p.119右下）の工房では、適切なゴミ処理を訴えるイラストを型紙を使って量産していた。

## ボゴラン布

SIAOの会場近くの「ワガドゥグ工芸村」でボゴラン（Bogolan 西アフリカ特有の泥染）を制作していたテキスタイル作家のトパン・マリアンTopan Mariamさんと仲良くなった。もと陶芸家で、紋様も伝統へのとらわれがない。作品2点を購入してつちのいえに持ち帰った。
入口にのれん風に飾ると、風合いがつちのいえにお似合いだった。

上：工芸村のマリアンさんの工房で。
下：制作中のマリアンさんの作品。幅10cm少しの布を縫いつないで一枚の布にしてあり、つなぎの縦縞構造がそのままデザインを導いている。

つちのいえの入口にのれん風にかけてみる。お似合いである。（2012年11月29日）

## ブルキナ親父の夜話会

**2012年10月7日**

ブルキナファソに10年以上滞在して、ワガドゥグで日本食堂を営みながら、孤児のための施設をつくる活動をされている飯田勉さん。もと美容師だが、50歳のときにもっと人の役に立ちたいとブルキナファソに渡られた。ブルキナベやJICAの人たちにもブルキナ親父として親しまれている。井上や前田菜月もお世話になった。
飯田さんが一次帰国されたのを機に、ブルキナファソの話を聞く夜話会を催した。

1_ワガドゥグの飯田勉さんのお宅にて（2012年11月1日、井上撮影）

2_現地で子どもたちのと活動する飯田さん

3_つちのいえでの夜話会で映像を見ながら（2012年10月7日）。このあとブルキナファソに戻られ、井上はSIAOで大工さんなど紹介してもらった。